

明治初期撮影 入道櫓・川手櫓が残る。鉄櫓は安政東海地震(1854年)の被害により半壊し、解体された。



東海の名城

YOSHIDA CASTLE

吉田城

現在の吉田城 豊橋産業文化大博覧会(昭和29年)のバビリオンとして、鉄櫓が復興された。令和3年2月撮影

# 豊橋市指定史跡 吉田城址案内図



## ①本丸

四隅に櫓を配し、中央には宝永大地震(1707)で倒壊するまで、将軍上洛時の宿所にした御殿があった。



●大手門(明治初期撮影)  
現在の大手通り付近。



⑩鉄櫓  
天守として築かれた、城内最大規模の櫓。



## ②安土桃山時代の石垣

池田照政(輝政)が築いたとされる、吉田城最古の石垣。



⑨着到櫓跡  
本丸入口を監視し、城内に集まった兵を観察した。

令和3年3月30日に、本丸・二の丸・三の丸を中心とする73370.92m<sup>2</sup>が豊橋市の史跡に指定されました。



## ③腰曲輪

豊川に面した部分の防御のために造られた曲輪。



## ④本丸南多門跡

本丸の正面入口にあった門。多聞櫓と千貫櫓で守りを固めた。



## ⑤北多門跡

本丸の豊川方面に築かれた門。内櫓形虎口が良く残る。



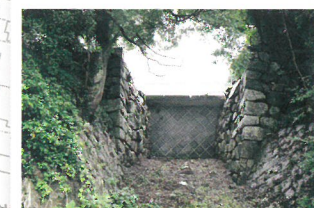
## ⑥金柑丸

馬出しと呼ばれる、攻撃的な防衛施設。



## ⑦三の丸土塁

堀を掘った際の土砂を積み上げて築いた土塁。



## ⑧水門

豊川から城内に物資を運び入れた船着場。

# 今橋城と戦国時代

吉田城の歴史は、明応5年(1496)頃、豊川のいっしき一色城主・牧野まきの古白こはくにより今橋城が築かれたことに始まる。今橋城の築城以前には、土着の武士である渡辺平内治わたなべへいないじの屋敷や浄業院という寺があったとされており、城の築城に際して移転したとされている。

牧野氏の対抗勢力は田原を拠点とする戸田氏で、今橋城の東約2kmにある二連木城の城主でもあった。当時、牧野氏と戸田氏は、駿河の守護大名である今川氏の勢力下にあった。今橋城時代の本丸は、現在の金柑丸きんかんまる付近であったと伝わるが、発掘調査では裏付けとなる遺構・遺物は確認されていない。実際には吉田城の本丸付近に、今橋城の本丸が存在した可能性が高いだろう。大永2年(1522)今橋は吉田と改名され、吉田城は戦国時代の争乱の中で、今川・武田・松平(徳川)ら戦国大名により激しい争奪戦が繰り広げられることとなる。



●吉田城航空写真 空から本丸を見る。



●戦国時代の堀



●土師器皿 戦国時代の素焼きの皿。儀式に用いられた。



●戦国時代の土師器



●吉田城北面の豊川

江戸時代の元禄14年(1701)に中神善九郎なかがみぜんくろうゆきただが書いた『牛久保密談記』うしくほみつだんきによれば、牧野古白が今橋城を築いたときの逸話として、「馬見塚ノ岡」を掘分し、豊川の「入道ヶ淵」を埋めた難工事であったことが記されている。吉田城の北を流れる豊川は、現在でも城付近で急激に深くなり、満潮時には水深8m以上になる。上流にダムや豊川放水路が築かれる以前は、さらに水量が多く、水流も強かったと考えられ、まさに天然の水堀として機能する優れた立地となっている。



●金柑丸の発掘調査

各時代に行われた盛り土ごとに、白線を引いて示している。今橋城が築城された頃の地表面は、現在より約1.2m低い位置(標高約9.7m)で確認された。築城以来、幾度も整備が行われる中で、膨大な量の盛り土が繰り返されてきたことが分かる。

# 酒井忠次と池田照政(輝政)

吉田城は牧野古白の今橋城築城以来、幾度となく争奪戦が行われたが、永禄8年(1565)に松平(徳川)家康が今川方の吉田城代・小原鎮実を攻め、吉田城を攻略し、重臣である酒井忠次を城主とした。忠次は新たに堀を造るなど、城の改修を行ったことが発掘調査で明らかになっている。また、当時の大手は飽海口であったとされており、東側が正面となる構造であった。



## ●鉄櫓堀底での発掘調査

安土桃山時代の石垣としては、東海地方屈指の規模(約12.7m)を誇る巨大な石垣。



## ●酒井忠次期の堀 断面がV字形の、薬研堀と呼ばれる構造。



## ●江戸時代の堀底に築かれた腰巻石垣

着到櫓西側の堀底部分を強固にするために築かれた。チャート・花崗岩を中心とする野面積み。



## ●戦国時代の堀(左)と、江戸時代の堀(右)

天正18年(1590)、徳川家康の関東移封に伴い、吉田城には豊臣秀吉の家臣である池田照政(輝政)が、15万2000石という大身で入城した。照政は吉田城を石高に相応しい大城郭へと改修し、現在知られる城の姿はこの頃に形作られたと考えられる。照政時代の代表的な遺構には鉄櫓下や裏門下の石垣があり、当時の最新の技術が用いられた。織豊系城郭を象徴する存在である。照政は家康の娘・督姫を娶り、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦後に52万石で播磨姫路へ転封となり、世界遺産となっている姫路城を現在の姿に大改修した。



## ●池田照政期の瓦

照政は石垣を築いただけでなく、礎石立ち・瓦葺きの建物を数多く築いた。こうした新時代の要素をもつ城郭は『織豊系城郭』と呼ばれ、近世城郭として吉田城が発展していく、重要な契機となった。



## ●武家屋敷地の出土遺物

照政が大改修した吉田城の構造は、江戸時代にも引き継がれた。江戸時代の武家屋敷地からは、肥前(佐賀県・長崎県)や瀬戸産の陶磁器類を中心とする、多彩な遺物が出土している。

# 吉田城の発掘調査

吉田城址は、東西約 1,400 m、南北約 600 m、総面積約 83.7 万㎡にも及ぶ、豊橋市内最大の遺跡である。また、全国でも10指に入る巨大城郭であった。令和3年度までに 58 回もの発掘調査が行われた。しかし、その面積は遺跡全体の3%程度である。

発掘調査では、吉田城(今橋城)築城以前の、縄文時代から中世にかけての遺構や遺物も発見されている。特に古墳時代前期の古墳、古代の渥美郡衙(郡役所)や、中世の伊勢神宮領・飽海神戸、今橋宿の存在が推定される点は特筆されよう。

三河湾にほど近い豊川と朝倉川の合流点で、豊橋平野を一望する高台に位置することから、古来より東三河の中心地であったことが分かる。



●奈良時代の総柱建物  
豊橋公園の中ほどから北側にかけてが、古代役所の中核部と推定される。



●地鎮具(戦国時代)  
板の上に銭が3枚乗せられていた。



●水神の祭祀跡(13世紀)  
土器と共に馬の頭が3点供えられていた。



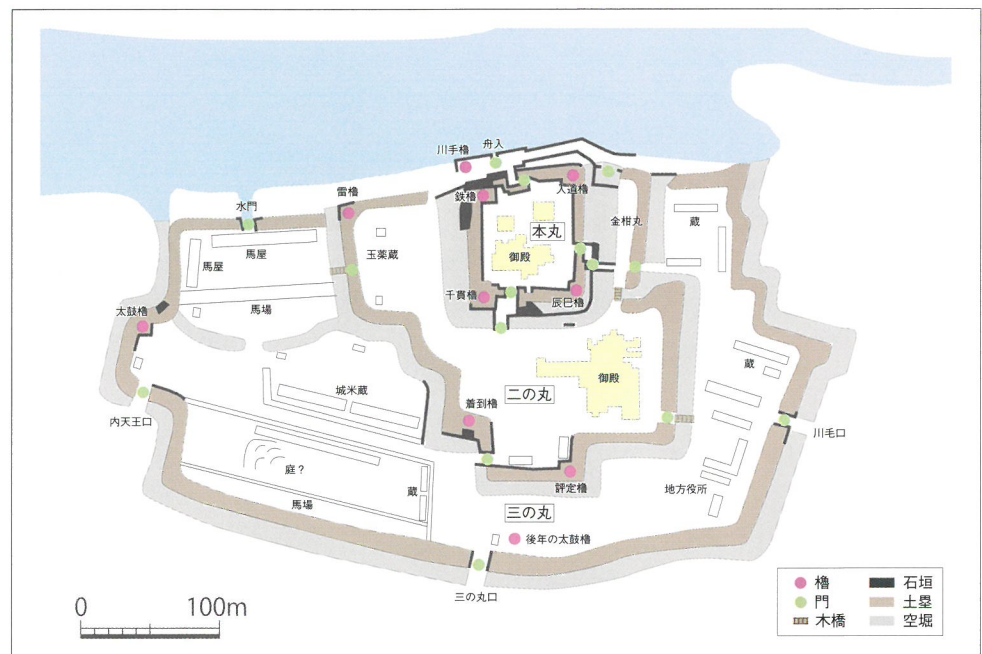
●古代の須恵器・陶器  
上段は奈良時代を中心とする須恵器、下段は平安時代の高級品である緑釉陶器と灰釉陶器。



●古代の井戸(破線部の範囲)  
奈良時代から平安時代にかけて利用された、直径4.2 mの巨大な井戸。井戸を埋めた土からは、大量の須恵器や灰釉陶器等が出土している。

戦国時代の吉田城の様子は文献記録には残されていないが、発掘調査によって当時の堀や屋敷地を区画する溝が確認されている。このことから、堀の周囲に溝で区切られた家臣団の屋敷地が廻る構造であったと推定される。

近世吉田城は、本丸と二の丸に御殿が築かれ、三の丸には城米蔵や馬場等の施設が建てられていた。また、三の丸の外側を家臣団の屋敷が取り囲み、さらにその外側を総堀が大きく取り囲んでいる。発掘調査によって明らかになった家臣団の屋敷地割は、江戸時代の吉田城絵図とも合致することが確認されている。



●吉田城中心部の模式図 近世吉田城の建物配置の略図



●吉田城主の家紋をあしらった瓦  
三階菱(小笠原家)、丸に並び鷹の羽(久世家)、丸に沼瀉(水野家)、繫ぎ九つ目結(本庄松平家)



●藩士屋敷地の八幡小路  
(現在の陸上競技場の南西あたり)  
2本の側溝を持ち、砂利で舗装されていた。

●三河国吉田城絵図（地震之節破損所之覚）  
 豊橋市美術博物館蔵（豊橋市指定有形文化財）  
 嘉永7年（1854）11月に発生した大地震による城内の破損状況を書き上げ、幕府に補修を願い出た際の控え。城の修復には、幕府の許可が必要であった。

## 吉田城絵図

吉田城絵図は約70点が確認されている。その所蔵状況を見てみると、写本などが全国各地に存在するものを除けば、東は笠間稲荷神社（茨城県）から西は広島市立中央図書館が、現在のところ吉田城絵図の確認されている範囲である。これら絵図の中には、現在鉄櫓が建つ位置を「天守」と記すものが数点存在し、鉄櫓が実質的な天守の役割を果たしていたことが分かる。このように本質的には天守でありながら、幕府にはばかり「櫓」と呼称する例は各地で見られる。

各絵図の信憑性はさまざまであるが、吉田城の構造の解明においては、その情報を絵図にしか求めることができない場合もあり、発掘調査などとあわせ、吉田城絵図の果たす役割は大きい。

●吉田城本丸二之丸略絵図  
 豊橋市中央図書館蔵（豊橋市指定有形文化財）  
 本丸と二の丸を鳥瞰図風に描いたもの。略絵図といいながら、写実性も見られる。ただし、本来は石垣が築かれなかった辰巳櫓下にも石垣を描くなど、誇張表現も。

●吉田藩士屋敷図（部分）  
 豊橋市美術博物館蔵（豊橋市指定有形文化財）  
 吉田城とその外郭の藩士屋敷、さらに総堀の外を走る東海道や、町屋を描いた絵図。藩士の名前から、幕末期の状況を描いたと考えられる。

# 石垣と刻印

吉田城の石垣は、本丸を中心に築かれ、他に門の周辺など、城内の要所に築かれた。石垣のうち、鉄槽下の北面と西面の石垣は池田照政期の遺構といわれ、江戸時代の二度の大地震にも耐えた、現存する城内最古の石垣である。近年では、裏門下の石垣も池田照政期の遺構であることが確認されたが、こちらは中央部分を江戸時代に積み直された様子を観察できる。

また、石垣の石材のうち、花崗岩類には○・△などの印が刻まれているものがあり、これを石垣刻印という。石垣の石材を採石地から運び出し、実際に積み上げていく各過程で刻まれたもので、本丸を中心に約 60 箇所を確認されている。ここでは刻印の位置図と、比較的見つけやすいものを紹介する(位置図と写真の番号はおおむね一致する)。

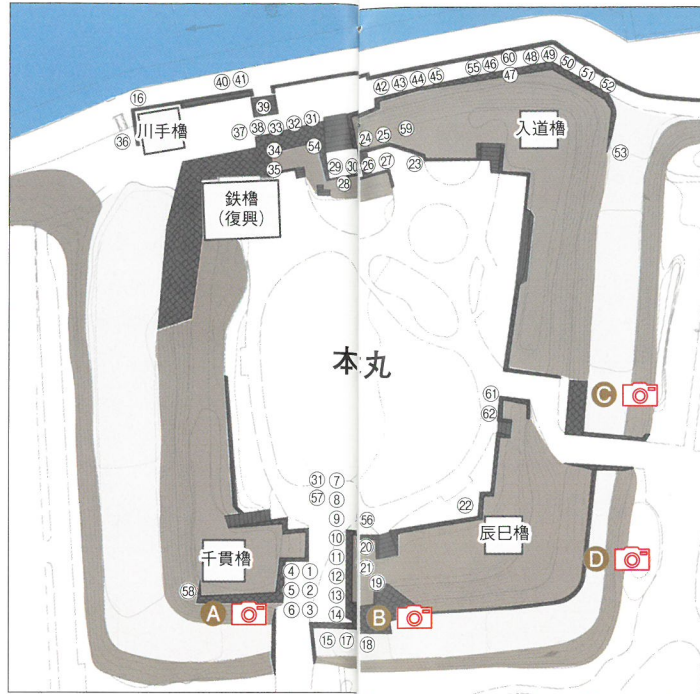
石垣の石材に刻印が刻まれた背景としては、①天下普請である名古屋城築城の残石を利用した、②吉田城のため独自に採石した石材に用いた、など様々な可能性が考えられる。ただし石垣は後世に積み直されたり、組み合わせ方が変化することも多く、石材の種類や刻印のみを対象とした研究には限界がある。よって、吉田城の石垣の実態解明には、石材や刻印だけでなく、築造技術や発掘調査による出土遺物を踏まえた検討が欠かせない。



A 千貫槽台石垣



B 南多門東側石垣



②三枚餅 ③樹 ④土佐カナ書



③鱗 ③丸に一引両



②7片輪車 ②6一文字星



③9鱗



④6裏銭



④9重樹(かさねます)



⑤0丸に「三」

注意:写真の刻印は、分かり易くするためチョークで色付けてあります。



C 裏門石垣

破線の内側が、江戸時代の修復部分。



②8三カギ団子



②4久留主(くるす)

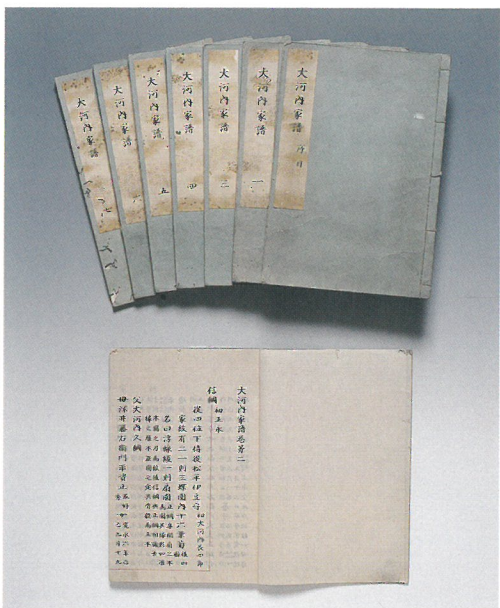


D 辰巳槽下腰巻石垣

## 吉田城由来の文化財

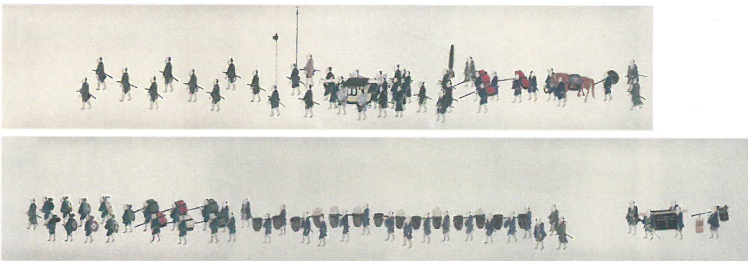
江戸時代後期の吉田藩主である大河内松平氏の祖は、知恵伊豆として有名な松平伊豆守信綱で、その曾孫信祝が正徳2年(1712)に藩主となった。信祝は浜松に移ったが、その子、信復の時に再度吉田に移り、計8代、約160年にわたって吉田を治めた。譜代大名の中でも由緒ある同家からは、老中など幕府の要職に就く者もあり、中でも信明は松平定信の後を受け老中首座として寛政の改革を推進したことで知られる。

同家は歴代に渡り学芸方面に造詣が深く、多くの遺品が今に伝えられている。これら古文書、書画、什器等は同家から豊橋市美術館等に寄託されている。



●大河内家譜(豊橋市美術館寄託)

序目から巻第七に至るまでの浄書本で、他に草稿本や写本が存在する。



●松平伊豆守行列図(複製)(二川宿本陣資料館蔵)

大河内松平家の大名行列の様子を描いたもの。侍・近従士に囲まれた駕籠に、藩主が乗っている。



●紋散牡丹唐草角赤  
(豊橋市美術館寄託)

黒漆の上に牡丹唐草模様を描き、表紋「三蝶円内十六葉菊」と替紋「三つ扇」を散らす。



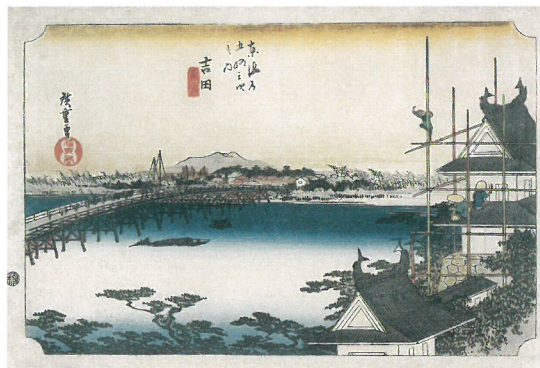
●紋入梨子地音川時絵香盆  
(豊橋市美術館寄託)

貞恭院(松平信明の娘)所用と伝わる。名を錦といひ、但馬国出石藩主・仙石政美に嫁いだ。

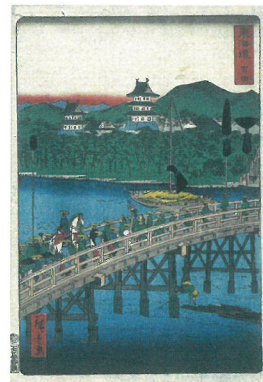
## 浮世絵に描かれた吉田城

吉田城の櫓に足場が組まれ、そこから街道沿線を眺める人物や、白壁塗りに取り組む職人を配した、おなじみの歌川広重「保永堂版東海道五拾三次」をはじめ、江戸時代には多くの絵師が東海道シリーズの浮世絵版画を制作した。広重だけでも20数種類描いたと言われる。

吉田の題材として多く取り上げられたのは、吉田城と吉田橋(現在の豊橋)である。江戸時代、東海道の橋が架けられていたのは、吉田橋と岡崎の矢作橋、琵琶湖の瀬田唐橋の三か所のみであった。そこで、地域色豊かな画題として多く採用された。また、川に隣接して城があるという立地から、吉田城と吉田橋の二点セットで描かれることが多く、東海道の名所の一つとなった。



●東海道五十三次之内 吉田豊川橋(保永堂版)  
天保年間初期 歌川広重(豊橋市美術館蔵)



●東海道 吉田(東海道名所風景)  
文久3年(1863)  
二代歌川広重(豊橋市美術館蔵)



●源頼朝公京都より下向之図 東海道吉田駅豊川之長橋 文久3年(1863)  
二代歌川広重(二川宿本陣資料館蔵)

江戸幕府将軍・徳川家茂の上洛を描いたもの。将軍家を描くことが禁じられていたため、その姿を源頼朝に仮託した。



# 吉田城関連略年表

西暦	年号	できごと	歴代城主等
1496	明応5	このころ、牧野古白が今川氏親の許しを得て、今橋城を築いたという。一説には永正2年(1505)。	牧野古白(成時)
1506	永正3	10月19日 今川氏親が今橋城を攻略。戸田憲光が牧野古白を破ったという。	戸田憲光
1519	16	牧野成三が戸田金七郎を逐い、今橋城に入ったという。	牧野成三
1522	大永2	牧野伝蔵信成が、「今橋」の名を「吉田」に改めたという。	牧野伝蔵信成
1529	享祿2	松平清康(徳川家康の祖父)が吉田城を攻め、東三河主要部を支配下に置いたという。	
1532	天文元	5月28日 松平清康が牧野信成を討ち吉田城が落城。牧野成敏を城主としたという。	牧野成敏
1536	5	12月 今川氏が、大原知尚を吉田城に置いたという(「三河国聞書」)。	大原知尚
1537	6	戸田康光が吉田城を攻めて牧野成敏を逐い、渥美郡大崎城主であった戸田宣成を城主としたという。	戸田金七郎宣成
1546	15	11月15日 今川義元家臣の天野景貴が戸田宣成を逐い、吉田城を攻略したという。	(今川家城代)
1564	永祿7	5月14日 吉田城代小原鎮実が、松平勢と下地で戦ったという。 6月22日 松平(徳川)家康が吉田を攻め、酒井忠次に吉田小郷一円を宛がう。	(今川家城代)
1565	8	3月7日 松平家康が三河を統一し、酒井忠次が吉田城主となる。	
1570	元龜元	豊川に土橋が架橋されるという。	
1571	2	4月28日 武田信玄が吉田城等を攻める。	酒井忠次・家次
1575	天正3	5月21日 織田信長・徳川家康が、武田勝頼を三河長篠で破る。	
1582	10	4月17日 織田信長が甲斐攻略の帰途で吉田城に宿泊する。6月2日 本能寺の変が起こる。	
1590	18	8月1日 徳川家康が関東に転封となる。池田照政が吉田城主となり、15万2千石を領す。	池田照政
1600	慶長5	関ヶ原の戦いが起こる。12月13日 池田照政が播磨姫路に転封となる。	
1601	6	2月 松平(竹谷)家清が、武蔵八幡山より吉田3万石に転封となる。	松平(竹谷)家清
1603	8	2月 徳川家康が征夷大将軍に任命され、江戸幕府を開く。	・忠清
1610	15	12月21日 松平家清が没し、忠清が遺領を継ぐ。	
1612	17	4月20日 松平忠清が没し、竹谷松平家は後嗣なく絶家となる(後に再興)。 11月12日 松平(深溝)忠利が、三河深溝より吉田3万石に転封となる。	松平(深溝)忠利
1622	元和8	11月25日 吉田城本丸御殿が完成する。	・忠房
1632	寛永9	6月5日 松平忠利が没す。8月11日 忠房が遺領を継ぎ、翌12日に三河刈谷に転封となる。 水野忠清が刈谷より、吉田4万石に転封となる(後に5千石加増)。	水野忠清
1642	19	7月28日 水野忠清が信濃松本に転封となり、水野忠善が駿河田中より吉田4万5千石に転封となる。	水野忠善
1645	正保2	7月14日 水野忠善が三河岡崎に転封となり、小笠原忠知が豊後杵築より吉田4万5千石に転封となる。	
1654	承応3	向山池(現在の向山大池)を築立て、城下の総堀に流入させる。	小笠原忠知・長矩
1693	元禄6	8月 吉田城下の下水道が改修されたという。	・長祐・長重
1697	10	4月19日 小笠原長重が老中となり、武蔵岩槻に転封となる。 6月10日 久世重之が丹波亀山より、吉田5万石に転封となる。	
1702	15	8月16日 久世重之が新居関番を命じられる(以後、吉田藩管轄に)。	久世重之
1705	宝永2	10月末 久世重之が下総関宿に転封となり、牧野成春が関宿より吉田8万石に転封となる。	
1707	4	10月4日 大地震が起こり、本丸御殿・二の丸御殿の倒壊を始めとした甚大な被害を受ける。	牧野成春・成央
1712	正徳2	7月12日 牧野成央が日向延岡に転封となる。 松平(大河内)信祝が下総古河より吉田7万石に転封となる。	松平(大河内)信祝
1729	享保14	2月15日 松平信祝が遠江浜松に転封となり、松平(本庄)資訓が吉田7万石に転封となる。	松平(本庄)資訓
1749	寛延2	10月15日 松平資訓が京都所司代になると同時に遠江浜松へ転封となる。 松平(大河内)信復が浜松より吉田7万石に転封となる。	松平(大河内)信復・ 信礼・信明・信順・信宝・ 信璋・信古
1854	安政元	11月4日 大地震が起こり、二の丸御殿や数多くの櫓が大破するなど、甚大な被害を受ける。	
1869	明治2	2月23日 大河内信古が版籍奉還を奏請する。	



交通案内 JR・名鉄「豊橋」駅前より市内電車乗車、  
「市役所前」下車、北へ徒歩5分

【編集・発行】愛知県豊橋市教育委員会 豊橋市文化財センター  
TEL.0532-56-6060 平成22年3月31日発行  
令和4年3月31日再訂

※本書を許可なく転売・転載することを固く禁止します。